

Pilot Profile

◆室屋 義秀 (むろや よしひで)

1973年1月27日生まれ

173cm/70kg

福島県福島市 在住

総飛行時間：約 2300 時間

内エアロバティック飛行時間：約 850 時間



幼少の頃テレビアニメでみた「[機動戦士ガンダム](#)」。その主人公 [アムロ・レイ](#) に憧れてパイロットへの道を歩みだす。共通点は「ムロ」もしかしたら親戚？自分もニュータイプ？などと思いながらガンダム搭乗を夢見る。その頃旅客機のコクピットを見学させてもらった事をきっかけに、ガンダムと飛行機のコクピットが融合しパイロットを目指す事となる。幼少期は木登りをして飛ぶ（落ちる）、自転車に羽をつけて飛ぶ（落ちる）などの独創的な訓練？を積み重ねる。



サッカーに熱中していた中学生時代に、練習中に突如飛行機雲で空に描かれた「POCALI SWEAT」。これを見てパイロット志望が再燃する事となる。そして月日は流れ 1991年、18歳から本格的な飛行訓練を開始。まずは費用の安いグライダーでパイロット訓練に入った。

映画「[紅の豚](#)」に強く影響され、飛行機野郎を目指し、20歳で飛行機操縦免許を取得するため単身アメリカへ渡る。飛行機のライセンスを取得するとともに、アメリカの航空産業の規模の違いに驚愕しその後のパイロット人生に大きな影響を与えた。

その後アルバイトで資金が調達できると1年のうち2カ月はアメリカへ渡り訓練を積み重ねた。同時期に国内ではグライダーでの飛行訓練に励み、オーストラリアで長距離飛行技術を学ぶなどして、国内競技会では好成績をおさめた。



1995年(22歳) 目標を「操縦技術世界一」のパイロットに

但馬空港で開催された[ブライトリングワールドカップ](#)。この大会で「[ユルギス・カイリス](#)」や「[パトリック・パリス](#)」が魅せた世界最高峰のエアロバティックス飛行に衝撃を受ける。目標を「操縦技術世界一」パイロットに定め、本格的エアロバティックスパイロットへの道を歩き始める。

国内でグライダー教官として飛行技術を磨くかたわら、訓練資金調達に2年を費やした。

1997年(24歳) 初の競技会(スポーツマンクラス)参戦

2月に再渡米し世界有数のエアロバティックス教官

「[ランディー・ガニエ](#)」に師事し本格的訓練を開始した。

このランディー教官により素質を磨きあげられ、

その技術を飛躍的に向上させる。6月には一か月にも

およぶ厳しいトレーニングキャンプを経て、初の競技会

(スポーツマンクラス) 参戦を果たした後、7月には

アドバンスクラス世界選手権に日本代表チームの一員として参加するまでに成長した。



1998年(25歳) 国内でエアショー活動開始

国内でのエアショー活動を開始し徐々にその活動は知られるものとなる。



2002年(29歳) 競技志向型エアショーチーム「Team deepblues」始動

本格的に世界レベルでのフライトを目指し、競技

志向型エアショーチーム「[Team deepblues](#)」を

[スホーイ 26](#)の導入とともに旗揚げし活動を開始

する。設立後まもなく資金難に陥り解散の危機

にあったが、[生活創庫・堀之内九一郎氏](#)の無償支

援により、チームは活動を開始した。



2003年(30歳) アンリミテッドクラス世界選手権へ初挑戦



アンリミテッドクラス世界選手権へ初挑戦する。右も左も分らぬまま臨んだこの大会で、プロフェッショナルが集まるアンリミテッドクラスの下位クラスとはケタ違いのレベルを痛感した。しかし同時にトップパイロットとの交流も持つ事が出来るようになったのが最大の収穫であった。

国内ではチームに[ロバート・フライ](#)が加わり[スーパーデカスロン](#)を使用しての、フォーメーションエアショーも開始した。



ホームベースである[ふくしまスカイパーク](#)においては、[NPO法人ふくしま飛行協会](#)を設立。航空文化啓蒙や青少年教育活動の基盤をつくる。

2004年（31歳）フォーメーションチーム「エアバンディッツ」結成

本格的なフォーメーションフライトのためにスホーイ 29 を導入。

スホーイ 2機でのエアショーを本格化。

そして秋にはスパーバイザーを務めていた帝王

「[ユルギス・カイリス](#)」との三機フォーメーション

チーム「[エアバンディッツ](#)」を結成。福島及

び都城でフライトを実施し喝采をあげる。



2005年（32歳）運命のプロジェクト

「POCARI SWEAT」スカイタイピングのプロジェクトを手掛ける。エアショー活動と並行して、航空啓蒙活動を本格化し絶大な反響を得る。自らも影響を受けたキャンペーンを手掛ける事に強い運命を感じる事となる。

この年、結婚。



2006年（33歳）活動の場は世界へ



アラブ首長国連邦・[アルアインエアショー](#)に参加。ついにチームは国内を飛び出しその世界を海外へ広げる。国内エアショーも含め約20か所でフライトを実施。

10月には、レッドブルエアレースパイロット「[ピーター・ベゼネイ](#)」のフライトイベントのコーディネーションを手掛ける。この際にピーター・ベゼネイにパイロットとしての素質を評価された。

ふくしまスカイパークにおいては、NPO法人ふくしま飛行協会が指定管理者制度のもと飛行場管理者となり、空港活性化活動を開始。第一子誕生。

2007年 (34歳) エクストラ始動

レッドブルとスポンサーシップ契約を結び、新型機 [エクストラ 300S](#)を導入する。

2006年まで使用していたスホーイ 26 は、スペインにあるレッドブルトレーニング施設に移動しトレーニングを続ける。

6月にはアンリミテッド世界選手権に参戦。

海外エアショーも本格化し、アラブ首長国連邦・オーストラリア・南アフリカ・ニュージーランドなどでフライトを実施。

11月、[FAIワールドグランプリ「オートボルテージ」](#)に初参戦。世界のトップパイロットから選ばれる8名のソロパイロット選手としてノミネートされた。



2008年 (35歳) トレーニングの日々

[レッドブル・エアレース](#)参戦を目指した本格的なトレーニングがレッドブル主催でスタート。

7か月間で8回のトレーニングキャンプを実施。7月にチェコで開催されたヨーロッパ選手権に参戦。運命的なコーチは、1995年に大きな影響を受けたブライトリングワールドカップ優勝者のパトリック・パリスであった。



9月スペインにて開催された「[レッドブル・クオリフィケーションキャンプ](#)」にて、エアレース参戦に必要なスーパーライセンスを取得。11月、FAIワールドグランプリ「オートボルテージ」に参戦。パブリックアワードで一位を獲得する。

11月15日、2009年のレッドブル・エアレース参戦が正式に発表された。

第二子誕生

2009年 (36歳) レッドブル・エアレース初参戦

レッドブル・エアレース・ワールドチャンピオンシップ 2009に日本人初、そしてアジアから初参戦。チームコーディネーターに盟友[ロバート・フライ](#)があたる。

前半戦をレースフライトの慣熟訓練に焦点をあてた作戦が功を奏し、後半戦から徐々に頭角を現す。[最終戦スペイン・バルセロナ大会](#)では、6位に入賞し高い評価を受ける。



国内でのエアショー活動も増え、エアレースを含めて28か所でのフライトを実施。



また国内初の曲技飛行競技会を試行し、エアロパティックスそして航空スポーツの安全追求、底辺拡大啓蒙活動を本格的に開始。

12月、国内の最も活躍した冒険家・挑戦者などに贈られる、[Faust A. G. Award 2009](#) で「挑戦者賞」を受賞。

冬季オフシーズンも、チームメイト：ロバート・フライのホームベースであるニュージーランドでレース機の改造・訓練に加え、エアショー活動なども精力的に実施。

第三子誕生。

2010年（37歳）国内初となる第一回全日本曲技飛行競技会開催

前年に引き続きレッドブル・エアレース・ワールドチャンピオンシップ 2010 に参戦。

また、国内では初めてとなる「[第一回全日本曲技飛行競技会](#)」を開催し事務局を務める。



現在まで13年間で170か所のエアショー実績。無事故。

最先端技術の象徴である航空産業。その究極の舞台で、日本の優れた技術そしてパイロットが存在する事を示し、「日本の力」を磨きあげる事を目指している。

そして、自らを「地上と大空を結ぶ架け橋」とするべく、スカイスポーツの普及活動に取り組んでいる。

◆ロバート エリック フライ

1952年2月14日生まれ

ニュージーランド・オークランド在住



幼少の頃からヨットセーリングを学び、国内選手権では18歳にして優勝を成し遂げる。高校卒業後は2年間工業技術を専門に学び21歳で日本に留学。

1973年より東京で食料関連の輸出入やヨット、その装備品の販売の職を得て働きはじめる。特に自動車のセンサー部やヨットのフィッティングに使用される特殊合金の輸出入に精通し、その経験がエアレースにおいても生かされている。上記勤務と同時にアドミラルカップなどのヨット外洋レース世界選手権にも数多く出場し、操舵手や船長としてその名を轟かせた。日本国内ではマッチレースで4度の総合優勝をかざっている。

1992～1995年の間は、ヨットレース最高峰のアメリカズカップではニッポンチャレンジチームを主導し、操舵手/ナビゲーターとしてレースに参加。引退後は“ショア・ボス”といわれる総監督として名手クリス・ディクソンを船長にむかえる手配などしてチームを強化し、また船体の整備や各種手配まで広範においてチームを支え6か月間をサンディエゴで過ごした。

サンディエゴ滞在中の1992年に、飛行機の操縦免許を取得。自ら自作した機体で免許を取得し同時にエアロバティックスの訓練も開始。2001年には日本で室屋義秀とともにエアショー活動を開始し、2003年にはスホーイ29型機を導入しその活動を本格化した。

現在はニュージーランドに在住。ニュージーランド国内でのエアショーをはじめ、フォーメーションチーム“エアバンデッツ”のチームリーダーとしてスホーイやヤク機を駆って世界中で活動をしている。

2009年からレッドブル・エアレース・ワールドチャンピオンシップに参加している室屋のチームコーディネーターも務めている。流暢な日本語を話し、日本人のワビサビを深く理解する。

◆ユルギス・カイリス

1952年5月6日生まれ

リトアニア国籍

[Jurigis-Kairys公式サイト](#)



彼の飛行への興味は、まだ小さい頃に家の近くの飛行場で、飛行機が離着陸を繰り返しているところを眺めているときに芽生えた。航空エンジニア（整備士）の学校を卒業し、整備士として働いていたが、操縦への興味は強く、地元の飛行クラブで飛行訓練を開始。その後アエロバティックスをはじめた。彼の素質と強い意志は飛び抜けていて、やがて彼はナショナルチームの一員となり、ソ連チームの一員として世界を転戦する事になる。

1982年には工学的技術力と操縦センスが認められ、スホーイ設計局に請われて働き始める。スホーイ 26、29、31 シリーズの開発にたずさわって、開発からテストフライトまでこなし、この傑作機を作り上げた。その成果は現在、最上級アンリミテッドクラスで使用される機体の8割がスホーイという現状に現れている。

ユルギスの強みはフリースタイルのフライトを得意とし彼自身と新型機の可能性を追求し続けていることにあるといえる。”カイリスホイール”や”スモールループ” ”コブラ” ”ホバリング”など、いくつものマニューバーを開発した。

彼の最近の創造性への追及はオリジナル新型機”JUKA”という形をとって現れた。彼はいまこの機体のチューニングに余念が無い。